１０．七重（西興部）地区の開拓

榊　田　千代松

※明治３１年生、秋田県出身、父辰太郎。

古い入植者

私が父に連れられて、西興部地域に入殖したのは、明治４３年で、現在の東興であった。明治４５年５月に、更に七重（西興部市街）に移住した。

七重は、当時の国道（仮定県道と言った）が、三浦木工場附近を通っており、入殖場所は三浦事務所のある所から、５０間ほど駅に寄った附近で、いまの駅と市街の中間くらいの所に、開拓小屋を建てた。

当時西興部地区の土地は、紋別の飯田佳吉の所有地だったのを、シカリベツ（一ノ橋）の田所新蔵が管理していて、これが一ノ橋の村上さんと、義達さんの手に渡り、私の家は義達さんの小作だった。

また、三浦木工場から川の方は、教員をしていた渡部徳次の所有地だった。

当時の市街附近は、中央部（神社下から駅前一帯）は、大半が湿地の葦原で、お寺附近とお茶の水沢、それに三浦工場裏が畑になる程度で、大きなクモや赤ダモが密生していて、農耕適地は少なく、当時は殆ど開拓されておらず、原始林そのままであった。

その頃の市街附近の入殖者は、三浦木工場事務所附近に、川勝庄太郎（雑貨店）渡部徳次（先生で宿屋兼業）森美治（呉服）田辺弥助（菓子）が居り、また農家では、三浦工場裏に、後藤吉助、増田某が居り、小学校下手に大内某という剣道の達者な人が居たが、市街区域は、これぐらいの人家よりなかった。

その後、１、２年のうちに、大行寺附近に伊藤惣右衛門、お茶の水沢出口に佐藤一が入地し、更に川向いに畠野乙蔵さん、菅原長助さんが東興から移住、義達さん一家も一ノ橋から移住して来て、笹山（幸治）と言う人の跡に入居した。この笹山と言う人は、市街地域では一番古い人らしく、私たちが入殖した頃は、既に空家になっていた。（菊地ヒデ附近）

七江橋附近には原田鉄五郎、今の小学校下に石田卯之助が居住していて、これらが七重地区では最も古い人たちであった。

※原田、石田は明治３９年に、七重地区に入殖している。

最初のハッカ作付

私たち一家は、大正４年から現在地（札久留）に通い作を始め、大正５年に七重から移住した。

これも七重では、最終には、２町５反歩ほどの作付しか出来ず、土地が狭かったので、現在地へ移住したのだ。

七重でハッカの作付を始めたのは、東興から移住した年だから、大正元年と思う。

その時の畑は、今の鉄道官舎（宿舎）から郵便局の方にかけて開墾したので、市街の半分位だったろう。ハッカの種根は、当時シカリベツ（一ノ橋）で開拓をしていた、義達貞太郎さんから分譲して貰い、それを植付けしたもので、西興部地域では、最初の作

付けであった。
　この種根は、永山方面から入ったもので、当時北見管内で、栽培の盛んであった湧別地方のものではなかった。
　その後、義達さん一家が七重に移住して来て、中藻方面で作り始め、また上興部では、駅逓の米田久作さんも作り出して、ハッカ栽培が急に盛んになって来た。

その他の状況
　私たちが東興に来た時、青柳と言う医者が米田駅逓附近に居たが、１年はどで転出したようだった。その跡を千葉（群次郎）と言う人が医者をやり、奥さんが産婆をしていた。

　※青柳という医者は、川勝庄太郎が、空知郡茶志内から招いたもので、年代は不明だ　　が明治末期で、本村地域最初の医者であった。（川勝庄太郎手記による）
　　また千葉の妻の名は、さい、昭和二年上藻の初代拓殖産婆となり、その後瀬戸牛　　（原田モトの住宅）で開業した。
　七重では、父たちが農業をやり、私は米田駅逓の逓送をやったり、駅逓の雑用や名寄からの荷上げをやった。駅逓の泊まり客は、多い時には７０人位もあり、食事を運んだり、布団敷をやらされたり、大変忙しい目に逢ったものだ。
　逓送は、上り下りとも３便で、大事な書留のようなものは駄ぐら（乗馬）で、小包類は馬車で運んだ。到着時間なども、なかなか厳しいものだった。名寄方面からの下り便が多くて、興部方面からの上り便は少なかった。
　その頃の道路は名ばかりで、砂利一つ入っておらず、雨降りが少し続くと、まるで水田の中を歩くようなもので、何処を馬車を通したら良いか分らず、畑のある所は、皆そのふちを歩き、ぬかるみは、到る所に割木が敷いてあった。
　天北国境には、小林茂吉さんが、米田駅逓の郵便配達をやりながら、茶店を開き、旅行者の休み場所であった。その頃の国境は歩き辛く、多くの人が救われた思いで、この茶店で休んだものだ。
　とも角、私たちが入殖したころの七重（西興部市街）は、市街地になるような所ではなく、未開の原野であったのが市街地になったのも、後に鉄道が開通し、駅が出来た為であろう。